

2023.10.11 第12回霊的講話 「イエス様に会った女性⑤」

おはようございます。朝晩はずいぶん涼しくなり、気持ちの良い季節になりました。

高校2年の生徒の皆さんは、昨日と今日、3つのグループに分かれて、北海道、沖縄そして屋久島へと研修旅行に出発しました。高校3年生以外の皆さんも、今週は林間学校や校外学習に出掛けますね。皆さんにとって良い研修となり良い経験となるように、そして健康も守られるようにお祈りしています。

さて、この霊的講話では、イエス様に会った女性について、一緒に聖書から読み、考えています。今日はその5回目です。今日は、新約聖書のマルコによる福音書5章21節から43節までをお読みします。新約聖書の70ページを開いてください。

「イエスが舟に乗って再び向こう岸に渡られると、大勢の群衆がそばに集まって来た。イエスは湖のほとりにおられた。会堂長の一人でヤイロという名の人に来て、イエスを見ると足もとにひれ伏して、しきりに願った。『わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう。』そこで、イエスはヤイロと一緒に出かけに行かれた。大勢の群衆も、イエスに従い、押し迫って来た。さて、ここに十二年間も出血の止まらない女がいた。多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなるだけであった。イエスのことを聞いて、群衆の中に紛れ込み、後ろからイエスの服に触れた。『この方の服にでも触ればいやしていただける』と思ったからである。すると、すぐ出血が全く止まって病気がいやされたことを体を感じた。イエスは、自分の内から力が出て行ったことに気づいて、群衆の中で振り返り、『わたしの服に触れたのはだれか』と言われた。そこで、弟子たちは言った。『群衆があなたに押し迫っているのがお分かりでしょう。それなのに、「だれがわたしに触れたのか」とおっしゃるのですか。』しかし、イエスは、触れた者を見つけようと、辺りを見回しておられた。女は自分の身に起こったことを知って恐ろしくなり、震えながら進み出てひれ伏し、すべてをありのまま話した。イエスは言われた。『娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らしてなさい。』イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人々が来て言った。『お嬢さんは亡くなりました。もう、先生（イエス様のことですね）を煩わすには及ばないでしょう。』イエスはその話をそばで聞いて、『恐れることはない。ただ信じなさい』と会堂長に言われた。そして、ペトロ、ヤコブ、またヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれもついて来ることをお許しにならなかった。一行は会堂長の家に着いた。イエスは人々が大声で泣きわめいて騒いでいるのを見て、家の中に入り、人々に言われた。『なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ。』人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスは皆を外に出

し、子供の両親と三人の弟子だけを連れて、子供のいる所へ入って行かれた。そして、子供の手を取って、『タリタ、クム』と言われた。これは、『少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい』という意味である。少女はすぐに起き上がって、歩きだした。もう十二歳になっていたからである。それを見るや、人々は驚きのあまり我を忘れた。イエスはこのことをだれにも知らせないようにと厳しく命じ、また、食べ物少女に与えるようにと言われた。」

さて、この聖書の箇所では、二人の女性がイエス様に会います。一人は、12年もの間、出血が止まらないという病気に苦しんでいた女性です。「出血が止まらない」病気というのは、現在の医学の区分で言えば、婦人科の領域に属する、女性特有の病気であったと考えられます。ずっと出血が続いているのですから、自由に行動することもできず、体力の消耗や貧血も激しく、常に痛みを苛まれる辛い生活をこの女性は続けてきたのです。しかも、治療を頼んだ医者も直すことはできず、逆に治療代だけは取られて財産を使い果たしてしまうという二重、三重の苦しみを味わってきた女性でした。そして、もう一人の女性はヤイロという人の12歳の娘です。父親のヤイロはユダヤ教の会堂を管理する人物でしたから、ある程度の社会的な地位があった人だと思われます。このヤイロの娘がどのような病気であったかは分かりませんが、両親に愛されていた娘であり、その娘の病気を両親がどれほど心配し、娘の死をどれほど悲しんだかを私たちは想像できますね。

今回と次回の霊的講話では、この二人の女性とイエス様の出会いについて考えてみたいと思うのですが、その前に、ひとつのことを考えてみましょう。そのこととは、この女性の病気が癒やされたという出来事、そして死んだ少女が死からよみがえるという出来事が聖書に記されているということです。「死からよみがえる」といっても、決してゾンビなんかになったわけではなく、以前と同じような可愛らしく健康な少女としてよみがえったのです。このように、聖書にはイエス様が不治の病気の人を癒やされ、死んだ人をよみがえらせた、いわゆる「奇蹟」と呼ばれる出来事がとても多く記されています。現代に生きる私たちにとっては、このような奇蹟が実際に起きたとは到底考えられないようにも思われるかもしれませんが。

これまでに皆さんも読まれたように、聖書には、私たちの心を打つような慰めや励ましに満ちた言葉があり、また、互いに愛し合うことや赦し合うことの大切さを教える教えもあります。しかし、同時に、同じ聖書が、イエス様やその弟子たちが病人を癒やし、死んだ者をよみがえらせたことと平然と語っています。それどころか、そのイエス様御自身が乙女であったマリア様から生まれたことや、十字架の上で亡くなられたイエス様が三日後に復活されたことも聖書には記されています。聖書に記されているこのような不思議な出来事を、皆さんはどのように考えられますか？ この聖書は、一方では人生の真理を表す深い言葉を、そして

私たちへの慰めや励ましに満ちた言葉を語るとともに、もう一方では奇想天外な作り話を平気で語っているのでしょうか？

皆さんと同じように、ミッションスクールの中学・高校に通っていた私も、聖書の中の奇蹟と呼ばれる出来事をどのように考えるべきか、いろいろと考えました。奇蹟それだけを考えるならば、とても信じがたいように思われました。しかし、ある時に気付いたのです。もし聖書が語っているような神が存在するなら、すなわち、全ての宇宙や自然界を創られ（創造され）、人間をも創られた神が存在するなら、さらに、その神が人格的な神、つまり、自分の意志をもって考え行動される神であり、同じ人格的な存在として創られた人間を愛し慈しまれる神であるならば、その神が時として人間に働きかけ、病気を癒やし、死者をよみがえらせることは、決して考えられないことではないでしょう。神が存在するなら奇蹟もまたありうる、と高校時代の私は考えました。ですから、そのころの私は、奇蹟があったかどうかよりも、まず、本当に神、聖書が語るような全能でしかも人格的な神が存在するのか否かを一生懸命に考えた、そのような思い出があります。

でも、皆さんの考えは、私の考えとは異なるかもしれませんね。皆さんは、神の存在や聖書に記されている奇蹟と呼ばれる不思議な出来事をどのように考えられますか？ あなたの正直な考えや思いも霊的講話ノートに記してみてください。

次回の霊的講話では、続いて、この二人の女性について考えたいと思います。

それでは、最後に、「主の祈り」をともに祈りましょう。